

## 胃がん検診と経鼻細径胃カメラ

消化器科部長 芦沢 信雄



現在胃がんによる死亡数は減少傾向にあり、増加傾向の肺がんによる死亡数に追い越されましたが、決して胃がんそのものは減少しているわけではありません。胃がんの場合には早期発見、早期治療により死亡率が低下してきており、胃がんが出来ても完全に治療する人の数がかかなり増加してきています。統計では死亡数しかわかりませんが、おそらく臓器別がん罹患数（がんになった人の数）ということになると、やはり胃がんが最も多いのではないのでしょうか。早期治療のためにはまず早期発見です。

胃がんの早期発見には、なんと言っても胃カメラ（口から内視鏡を挿入して食道・胃十二指腸を観察する検査）です。胃透視（バリウムを飲んで胃を撮影するレントゲン検査）と比較して胃カメラの方が早期胃がん発見率も高いことは明らかですが、苦痛のために胃カメラを敬遠している人も多いようです。当院ではこのような方のために鼻から挿入できる細径の胃カメラを導入して、食道・胃・十二指腸検査を行っています。太さは従来の胃カメラの約半分（直径5mm）であり（図1）、さらに図2のように鼻腔から入り舌の奥の方を刺激しないので、嘔吐反射が起こることがなく苦痛が非常に少なくなりました。今までに大変苦しい思いをしたために胃カメラ検査を敬遠していた方は、是非当院内科外来までご相談ください。ただし、この経鼻細径胃カメラ検査の対象となるのは今までの検査で苦痛がひどかった人です。やはり従来の胃カメラと比較すると画像がやや不鮮明となり、検査精度が少し低下しますので、今までの胃カメラ検査であまり苦痛のなかった方は従来の経口胃カメラでの検査をお勧めします。また、鼻血が出やすい人や鼻に病気のある人などは経鼻胃カメラ検査をしてはいけません。



図1 上 最新式胃カメラ  
下 従来の胃カメラ

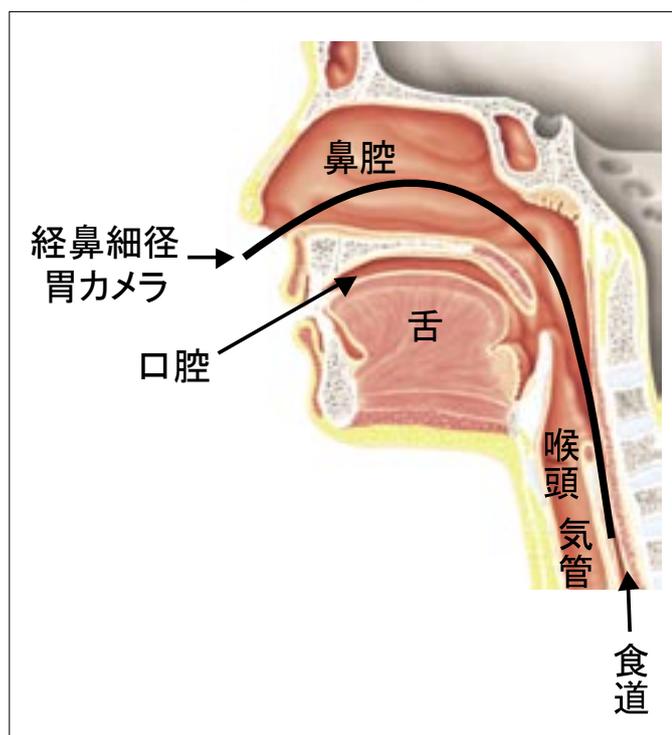


図2

ところで、大部分の早期胃がんは転移をするような進行した胃がんになるのに数年かかります。非常に進行の早い胃がんが稀にありますが、一般的にはみなさんが考えておられるよりも、胃がんは初期段階では非常にゆっくりと進行しているのです。したがって、少なくとも年に1回胃カメラ検査を受けていただければ、胃がんで死ぬことは稀なことになります。特に胃がんのために胃を部分切除した人や内視鏡治療を受けた人の場合、残った胃粘膜が何年経過してもがんの発生しやすい状態であることは明らかです。大腸がんの場合も同じです。このような方こそ毎年検査を受けることを忘れないでいただきたいと思います。いまだに胃がんで亡くなる人を度々見受けますが、今の時代に定期的な胃カメラ検査も受けずに胃がんで死んでしまうのは本当にもったいないことだと思います。これまた知らない、とても損な話です。